

平成24年度 第2回山梨県考古博物館協議会議事録

1 日 時 平成24年12月18日(火) 午前10時～

2 場 所 考古博物館(風土記の丘研修センター)

3 出席者 (敬称略)

(委員) 堀内邦満、刑部茶苗、小川はるみ、大隅清陽、椎名慎太郎、谷口一夫、
齊藤洋子、堀田一朗、今福政江、杉野美幸、篠原春子、吉岡剛、
佐久間豊人 13名

(事務局) 神津館長、福島次長、保坂学芸課長、学芸課員4名、総務課員2名

(教育庁) 学術文化財課員2名

4 会議次第

- (1) 開会
- (2) 会長あいさつ
- (3) 議事
- (4) その他
- (5) 閉会

5 会議に付した事案の件名

- (1) 平成24年度考古博物館経過事業について
- (2) 平成24年度考古博物館予定事業について
- (3) その他(考古博物館基本理念の策定について)

6 議事の概要

○ 平成24年度経過事業に関する質疑等

(委員)

ブログで考古博物館を紹介させてもらっているが、灘高校とか開成高校は考古博物館に来ているか。金山博物館には毎年来ているようだが。吉田や大月の学校なども学力が上がってきており、進学校に力を入れてPRすることも効果的だと思う。

(事務局)

近年は来ていないと思うが、以前に研修センターの体験ではなく、博物館の見学に来たことは何度かあったと思う。

(委員)

灘と開成については、金山博物館へここ10年くらい毎年来ている。

○ 考古博物館基本理念策定に関する質疑等

(委員)

これは条例がなくなるというわけではなく、条例を具体化するために付け加えるというよう

なイメージか。

(事務局)

条例自体は漠然としたものであり、どこに重点を置くかとか、もっとうちの方がいいとか細かいことが出てくると思うので、その辺を分かりやすく示すような内容を考えている。

(委員)

「学校教育現場の変化」とあるが、これはここに来館する学校の変化というようなものを捉えて「変化」と言っているのか。

(事務局)

当館については学校利用が大きなウェイトを占めている。その中で、「教育指導要領」の改正とか、校外学習に使える時間が減少しているとか、校外学習をしたいが予算の制約の中できなかな実施できないなどの状況があるかと思う。その辺の事情を聞きながら、考古博物館としてそれにどう取り組むのか、また当館だけでなく県立4館、あるいは県内の博物館と連携して取り組まなければならないことがあるのかもしれない。そういったものを、具体的に歩を進めるための方策として検討してみたいと思っている。

(委員)

現在、県の知事政策局などと一緒に、中部横断道沿線活性化推進協議会をやっている。中部横断道によるストロー現象で、人口にしろ観光にしろ吸い取られてしまうのではないかという問題意識から、沿線地域活性化の構想を検討している。

その中で、学校教育では教育旅行が一番変化が起きている。どういう変化かというのと、これまでの教育旅行、修学旅行というと奈良、京都というのがほとんどで、学校にとってもこれが一番安全で、旅行会社が全部やってくれるので苦労しなくてすむ旅行先だった。しかし、これだと生徒が何にも学ばないということがやっと分かってきたらしく、今教育旅行が非常にブームになっている。

新潟県とか、長野県の飯田、静岡県焼津、群馬県のみなかみなどで、飯田は年間30万人の教育旅行を集めており、みなかみなどは80万とか100万人を集めている。しかし、それに対応した大きな受入施設があるわけではなく、日帰りもあれば、旅館などに泊まって1泊2日や2泊3日というスケジュールもある。HIS、JTB、近畿日本ツーリスト、クラブツーリズムなどの大手旅行会社は、こうした教育旅行の部門を持っており、さらに公立を対象とした部門と私立を対象とした部門に分かれている。

9月にこのような旅行会社の関係者を山梨県に呼んで、第1回目のモニターツアーを実施した。富士五湖から入って、本栖湖でカヤックを体験したり、早川で野鳥観察をしたり、廃校を利用した「ヘルシー美里」という宿舎に泊まったりした。11月末には第2回目として、大柳川渓谷を渡ったり、「みみ」料理を体験したり、篆刻を実際に作ったり、切り絵美術館で切り絵をしたりしたが、ものすごく盛り上がった。旅行会社の企画担当者は、東京からこんな近い場所にこんなところがあるとは知らなかったということで、この旅行ルートの中に、この考古博物館とか、富士川の上流域の釜無川や笛吹川の沿岸にある様々な文化施設や教育施設などを入れることで相当成果が上がると、相当にいい印象を持って帰って行った。旅行業界としても、最近利益が上がる旅行が少なくなっているということで、これからは教育旅行に力を入れていくというのが流れのようである。

教育施設にとっては、教育旅行に伴って来館者増に繋がっていくチャンス。現在の沿線活性化協議会は区切りとなるが、「教育旅行誘致推進協議会」といった形に衣替えをしながら、積

極的に進めていく環境ができつつある。

(委員)

この「基本理念」は骨子案のようなもの、プラス具体的な例のような形になるのか。

(事務局)

あまり細かい、難しいものではなく、ホームページ等に掲載して「こういうところを目指している」ということが、目で見てパッと分かるようなものを考えている。

○ その他の質疑等

(委員)

1 点目は事務局に質問だが、大成功だったインカ帝国展において、協力会のメンバーが1日10名程度のシフトで出労するのはきつかったと思うが、その辺について協力会のメンバーからどんな感想が出ているか。

もう1点は、学校教育関係の皆さまになるが、「ゆとりの時間」を減らしたことで、世界の学力調査で日本の成績が少しだけ上がったという報告を聞いたことがある。「ゆとりの時間」の削減というのが、学校現場で子ども達を外に連れ出して学ばせるという活動を企画するのに影響が出ているのかどうかについて伺いたい。

(事務局)

協力会の出労の件について、インカ帝国展の50日間で、多い時では15名程度、少ない時でも7、8名の皆さまにご協力頂いた。受付の案内や入口でのチケットのモギリ、館内の監視員やショップの運営をはじめ、今回一番苦労した3Dシアターのメガネ拭きなど、協力会の皆さまの協力なしには成り立たなかった。95名の方々が曜日ごとに班を作って、ほとんど毎週出労して頂いたという状況。本当に感謝申し上げたい。

(委員)

協力会の皆さまには、当協議会からもお礼を申し上げたいと伝えて頂きたい。

(委員)

地域と子ども達を通う学校の規模によって若干の違いがあるので、山梨県の小学校全体ということではないが、「新学習指導要領」になって確かに6校時が増えたので、そういう意味では時間がなくなっている。6校時が3時半頃に終わって、帰りの会をして帰るのが4時くらいになる。学校生活の中でも子ども達のゆとりがなくなってきたという面もあるし、先生方も学習だけではなくて生徒指導上の問題を抱えている学校もあるので、頑張らなければならないという状況もある。

山梨県は、盆地の下の方は中規模校、大規模校だが、山間部では小規模校がほとんどになっている。そういう学校では、同じ学習でも短い時間でできることもあるので、「ゆとりの時間」を作って博物館へ学習に行くということも、取り組む気持ちになれば取り組むことができる。

全国学力テストについても、学力向上は山梨県の課題であるので、各現場ではそれに向かった取組を一生懸命やっていると思う。そういった意味で、体験的な学習も同時に併せてやらなければならないのだが、その工夫が各学校に課題として求められているということ。

(委員)

生徒が自分たちで勉強したいところに何人か集まって行く、校外学習のようなものはどうか。

(委員)

中学校の場合はそういう風にやると思うが、総合的な学習の中でやることが多いと思う。小学校ではそういうことはなかなか難しく、総合学習では自分の学校の回りを見て回るということが多い。

学校の利用状況について、富士東部の大月方面の利用者が増えているというのは、おそらく昔でいうところの春や夏の遠足という意味での校外学習で、中央高速もあるので考古博物館が利用しやすいということではないかと思う。笛吹市で利用がないというのは、場所が目と鼻の先で校外学習としては近すぎるといっていいのではないか。それに比べると、甲州市や山梨市は若干遠いので、ここを利用する場合もあると思うが、高学年になると「校外学習」ではもう少し足を伸ばして富士吉田や中富の方へ行ってしまおうのではないか。三富小学校ではこれまでは遠足のコースに入っていたが、遠足は別のコースにして教科学習の中で連れて来ることにした。美術館や県博、考古博物館については、遠足のニュアンスではなく、学習の場として捉えて活用しようということ。

(委員)

学校がそういう場として活用してくれると、また変わった数字が表れてくると思う。

(委員)

ここで感謝を申し上げたいが、三富小学校で4、5、6年生をインカ帝国展に見学に連れてきたが、子ども達がとても感動したらしく、保護者を連れて再度来ている子ども達がいた。感動が人を動かしているのだということ、子どもを通して改めて学ばせてもらった。

(委員)

中学校で教鞭を執っていた時にインターンシップをやったが、3日程度で何ができるのかと受入先から言われたことがあった。大学でもボランティアが主流になってきているが、小中学校でも夏休みや冬休みの間にボランティアをしましょうという課題が出されたりしてきている。

現在、教育現場でボランティアの指導はどのような状況か伺いたい。埼玉県などは進んでいるようで、学校から長期の休みを利用してこのような活動をしましょうという具体的な例を紹介してくれて、学校としては相談を受け付けるだけで、家庭の中で子ども達が自分で考えてやってみようというような形でやっているらしい。

(委員)

今から15、6年前の「総合的な学習」ということが言われる前に、ここに田代先生という方がいた。私は学年主任をしていたが、体験とか経験とか出会いということが将来の子ども達の進路に影響を与えるということで、30人位を3回に分けてこちらに伺った。何も分からない子ども達に、田代先生が半日かけて丁寧に教えてくれた。その中で思ったのは、現在「総合的な学習」で学びの場を広げているが、一律にということとはなかなか難しいということ。高校生になると、それぞれの興味関心も変わってくる。

現場の担当者はどうしても数ということが気になるが、それとは別の部分で、考古学に関して将来バトンタッチしていく人材はそれほど大勢はいないと思うし、それだけのキャパをもって就職できる状況もないと思う。それでも、将来のそういう文化を伝承する一部の人間を育てるということは必要になってくる。

高校生が学校として考古博物館を利用するとなると、予算も縮小されており、計画することは難しくなっている。結局、興味・関心のある生徒が個人的に利用するということになる。小学生は親を巻き込んだ形にできるが、高校生になるとそれはなかなか難しい。交通の便がいいかという、どこからでも来られる状況ではない。

そういうことを考えると、あまり極端に数のことを言うのはどうかなというのが感想。それより質の問題になってくるのではないか。例えばある高校では、大学などから講師に来てもらって、いろいろな分野の模擬講義などをやっている。以前に子ども達を連れてきた時代から比べると様々なイベントを企画されているようで、それで手一杯なのだと思うが、そういう考古学の出前授業のようなことも、1つのアプローチとしてあると思う。

(委員)

先ほどの教育現場でのボランティア教育というのは、年齢層としてはどのくらいを想定した質問か。

(委員)

今までは大学とか高校でと思っていたが、この冬休みに私の子どもの小学校で配られていたプリントに、小学生でもできればボランティアをしてくださいという内容が書いてあってビックリした。小学生、中学生では労働力としてはあまり期待されていないだろうし、ボランティアとして何ができるのかよく考えないといけないのではないか。

大学などでは「サイエンス・カフェ」という、学生や市民に気軽に科学に興味を持ってもらうという取組をやっている。例えば「考古学カフェ」のような形で集客もできるかなとも思うが、大学生であれば自発的にそういう形でボランティアを募ることはできると思う。ただ、小中学生となると、ボランティアについて、家庭はこのように送り出す、学校はこのように見守る、地域とも連携するというようなことをきめ細かく考えてあげることが必要になってくると思うので、その辺りについて教育現場ではどうされているのかと思ったということ。

(委員)

例えば金山博物館では、子どもの居場所作りをずっとやっている。そうすると、非常に少人数で館を運営しているのを見て、子ども達が知らない間に玄関やトイレの掃除を、自発的にやってくれるようになってくる。私はボランティア教育をしてやりなさいということではなく、その環境にいて馴染んでいけば、手が行き届いていないところに、自然発生的に手が伸びるようになる実感している。